**セブン＆アイ鈴木会長を追い詰めた「２枚の白票」**

### カリスマの引き際（１）

　鈴木敏文セブン＆アイ・ホールディングス会長兼最高経営責任者（ＣＥＯ、８３歳）の突然の辞任表明が波紋を広げている。日本にコンビニを持ち込んで根付かせたカリスマ経営者は、引き際を誤ったのか。「コンビニの神様」の去就をめぐる大騒動をリポートする。

　ＪＲ四ツ谷駅から皇居に向かって徒歩３、４分。「新宿通り」と呼ばれる表通りから少し入った東京都千代田区二番町の一角に、セブン＆アイ・ホールディングスの本社がある。このビルはセブンーイレブンやイトーヨーカ堂と取引する業者で終日ごった返す。

　満開の桜が散り始めた４月７日朝、本社９階の会議室で同社の取締役会が開かれた。そこでの評決の内容が次第に明らかになりつつある。

「会社提案」として提出された議案は同社傘下のセブンーイレブン・ジャパンの社長交代だった。井阪隆一社長兼最高執行責任者（ＣＯＯ、５８歳）が退任し、後任に古屋一樹副社長（６６）を昇格させる内容である。

　取締役は１５人。「賛成７、反対６、白票２」で、議案は過半数の賛成を得られずに否決された。

　賛成したのは鈴木会長と、その側近である村田紀敏社長兼ＣＯＯ（７２）、鈴木会長の次男、康弘取締役（５１）、そして社内の取締役４人。

　反対したのは井阪氏本人、創業者の伊藤雅俊名誉会長（９１）の次男、順朗取締役（５７）、そして社外取締役４人が全員反対に回った。

　白票を投じた２人は、いずれも社内の取締役である。旗幟（きし）を鮮明にしていた村田氏、井阪氏と伊藤家、鈴木家の取締役を別にして、社内取締役６人のうち４人が鈴木会長を支持した。残る２人が「白票」という形で伊藤名誉会長の次男と行動をともにしたのである。

### 仕組まれた？「白票２枚」

　「この票数は、反対する側が仕組んだものと言われています。『白票２』というのがポイント。数では賛成が上回るようにして、それでも否決する絶妙の票数です」。セブン＆アイの関係者が解説する。

　人事案は３月末に開かれた同社の指名・報酬委員会にかけられていた。同委員会は鈴木会長、村田社長、それに社外取締役の伊藤邦雄・一橋大名誉教授、米村敏朗・元警視総監の４人で構成されている。

　鈴木、村田両氏が主張した井阪氏退任に対し、社外取締役２人は「井阪氏が社長を務めた７年間、セブンーイレブンは成長を続けてきた。それを代えることは、世間の常識から言って承諾できない」と強く反対した。同委としては２対２の平行線のまま、結論がでなかったのである。

　井阪氏本人は２月１５日に鈴木会長から退任の内示を受け、その２日後に退任を拒否した。そして、創業者の伊藤名誉会長を味方につける。その次男の順朗取締役や伊藤名誉会長に近い社内取締役、これに社外取締役が加わって、人事案は否決された。

　井阪氏、伊藤家、それに社外取締役という「トライアングル」ができあがったのは偶然ではない。それは、後任として示された古屋氏が、井阪社長の８歳年上だったこと、鈴木会長が井阪氏に辞任を迫るやり方が強引だったことがある。

そして、思わぬ役者が「反鈴木」の役割を果たす。大株主の米投資ファンド、サード・ポイントである。この大株主によって鈴木氏次男の康弘取締役の「世襲問題」がクローズアップされるのである。

### サード・ポイントの果たした役割

　サード・ポイントは昨年秋、セブン＆アイの大株主として登場した。株式をどの程度保有しているかは公表していない。それがサード・ポイントのやり方だ。そして、セブン＆アイ傘下で業績不振のスーパー、イトーヨーカ堂の分離といった経営改革を要求してきた。

　サード・ポイントは３月末、メディア数社を集めた会合を開き、井阪氏退任の人事案に反対する書面をセブン＆アイに送ったことを明らかにした。そして、その書面で人事案について、「鈴木氏が、ご子息である康弘氏を将来の社長に就ける道筋を開くといううわさも耳にする」との批判を書きつづったのである。

　大株主があからさまに鈴木家の「世襲」の懸念を示したことで、人事案に反対する包囲網がより確固なものになったと言っていい。サード・ポイントはなぜ、人事情報をいち早く入手したのか。鈴木氏は４月７日の記者会見で、「獅子身中の虫がいた」と吐き捨てるように述べたのである。